

教職課程において博学連携をどのように扱うか

—日本女子大学通信教育課程教職科目「社会科教材研究」を事例に—

石田尚子*¹・田部俊充*²

1. 通信教育課程教職科目「社会科教材研究」の概要とフィールドワークの位置づけ

日本女子大学家政学部通信教育課程は、1949（昭和24）年に設立され、1950（昭和25）年3月に認可された。受講生はテキスト（印刷）教材で学習を行い、面接授業（「夏期スクーリング」等）において教室で直接教員より指導を受ける授業形態である。年齢も職種も多岐にわたる約2200名の受講生が在籍しており、約8600名の卒業生を輩出している（2013年10月現在）。通信教育課程においても小学校教諭一種免許状の取得が可能である。

2013年度小学校教職科目「社会科教材研究」は6日間（8月19日～24日）設定され、受講者は32名だった。人間社会学部教員の田部が科目担当教員を、附属中学校教諭の石田が3日目から5日目の授業補助者を務めた¹⁾。受講生に社会人経験者を含んでいるため、苦勞しながら受講している学生も多い。しかし、資格取得という目的が明確であるためか、受講態度は真摯で、担当者も指導上の工夫が求められる。

科目担当者が考えるこの授業の柱は、①「社会科論」社会科教育史や海外の社会科カリキュ

ラムを理解し、多様な授業実践事例を紹介しながら、学習指導要領の目標や内容を理解する、②「模擬授業」実際の授業を想定したグループワークによる学習指導案の作成と模擬授業、③「フィールドワーク」の3点である。1日目から6日目までの日程は以下の通りで、③「フィールドワーク」は1日目に体験的活動の重要性について学習し、3日目に事前指導、4日目に東京駅周辺のフィールドワーク、5日目に事後指導となっている。

小学校教職科目の「社会科教材研究」にフィールドワークを明確に位置づけた一番の理由は、時間数の削減などにより一番実施率の高い小学校社会科におけるフィールドワークの実施が危ぶまれている点にある²⁾。小中高社会科・地歴科において「身近な地域」の教育的価値や学習意義が述べられ、フィールドワーク（野外調査）についても重要性が論じられており、大学の教員養成の段階で野外調査を含めた教育の充実を図るべきである、という指摘もある（井田・藤崎・吉田、1992）。しかし、授業時間数が少ない中で今後に向けて改善するためには、地理的内容と歴史的内容を内容的に連関させる、博物館の活

表1 2013年日本女子大学通信教育課程小学校教職科目「社会科教材研究」の日程

	①社会科論	②模擬授業	③フィールドワーク
1日目	学習指導要領の概要（中学年） 地図帳・地図・地球儀の活用	オリエンテーション（役割分担） 模擬授業の相談（本時の内容）	体験的活動の重要性
2日目	学習指導要領の概要（高学年）、ICT	模擬授業の相談（発問・板書計画）	
3日目	海外の社会科関連カリキュラム、ESD	模擬授業の相談（掲示物・ICT）	事前指導
4日目		学習指導案の提出	東京駅周辺フィールドワーク
5日目		模擬授業3チーム	事後指導
6日目	テスト	模擬授業6チーム	

*¹ 日本女子大学附属中学校 *² 日本女子大学

用を考えるなどの工夫が必要であるとする。なお、この授業は集中授業であるため授業のやり繰りによりフィールドワークが可能となった。

本稿では、大学の通信教育課程の教職課程における博学連携の扱い方を検討した。科目「社会科教材研究」を事例として、スクーリングの授業にフィールドワークを取り入れ、見学先（インターメディアテク）の特質を考察し授業に活かした。なお、1を田部が2～5を石田が分担して執筆した。

2. 学校による博物館の利用について

博物館が教育にもたらす効果は大きく、学習指導要領解説においても取り上げられている（文部科学省、2008）。学校と博物館の関係のあり方については、行事だけの「利用」から日常的な「活用」へとその質を変化させてゆくこと、「ひとつの目的達成のために密接に結びついて活動できるような関係を日常から醸成しておくこと」（大堀、1997）の重要性が指摘されて久しい。その実現に向けて教員が果たす役割は重要であると考え、今年度のフィールドワークを計画した。

3. 見学先（インターメディアテク）について

2013年8月の講座では、JPタワー（東京中央郵便局跡地。東京駅丸の内南口徒歩1分）内のインターメディアテク（2013年3月開館）を訪れた。ここは、日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館が協働で運営する施設で、東京大学関連の所蔵品を展示し、研究者・学芸員を目指す学生・博物館ボランティアが運営に携わっている。夏休みには小学5年生以上を対象に、研究者が講師を務める「IMTカレッジ東大教室」³⁾を開講するなど、大学ならではの活動も行っている。尚、入館料は無料⁴⁾で、誰でも自由に見学できる。

フィールドである丸の内にある博物館の中から、見学先としてインターメディアテクを選んだ理由は、大きく2つある。1つ目は、博物館はどうあるべきかを自問し、新たな挑戦をしていることである。従来、博物館では展示される資料は一部であり、大部分の資料が倉庫の中に死蔵

されたり、廃棄されたりして、人々の学びに貢献できない状態にあった。このことは、博物館が「社会とその発展に奉仕する一般に公開された非営利の恒久的な施設」（国際博物館会議、2004）であることを考えると、大きな問題である。そこで、少しでも多くの人々に所蔵品を見てもらえるよう、収蔵品を持ち出し可能なユニットにし、それらの組み合わせを変えながら、中長期のスパンで各所を巡回させる「モバイルミュージアム」という取り組みが始まった。そのうち代表的なものが東京大学総合研究博物館であり、インターメディアテクはその一環である。受講生が、博物館を古い資料の展示・保管場所としてではなく、社会に関わる施設として捉えなおすきっかけになればと考え、インターメディアテクを選択した。

2つ目は、このモデルには、学校から博物館への依頼が中心となっている、現在の学校と博物館の関係性を変えてゆく可能性があるからである。従来、学校が博物館を利用する際には、私たちは行事や授業、教員研修の一環として博物館に受け入れてもらうことが多かった。筆者が学生時代に博物館実習でお世話になった学芸員の一人は、「せっかく学校で事前学習をしても、当日は子どもを博物館に引率したらあとはこちらにお任せと言わんばかりの先生もいる。学芸員だけではなく、生徒たちも先生のように気が付いているし、それでは一生懸命に展示を見るわけがない。」と話していた。このような教員は一部であるとしても、多くの学校は、完成された博物館、学芸員がすでに存在し、児童生徒を連れて行けば、何かを教えてもらえる、与えてもらえるという姿勢で博物館を利用してきた。

これに対し、モバイルミュージアムでは、博物館と学芸員もまた変化の途中と捉え、運営者と来館者がともに成長していくという考え方に立っている。先述したように、モバイルミュージアムの取り組みでは、学芸員を目指す学生が、展示の企画・運営に関わっている。そして、彼ら（彼女たち）は、子どもを含む来館者の感想を聞くことによって、自身が使っている言葉が専門

的な用語であることに気付き、一つ一つ改善するとともに、展示品の組み合わせや解説を更新していく（西野，2012）。学生たちは、学芸員として来館者に教える立場であると同時に、教えられ、育てられる立場にもなるのだ。一方、来館者は、博物館の資料や学芸員から教えてもらうだけの立場ではなく、専門家である学芸員に教え、ときには展示資料作りに参加することにもなる。この逆転の体験は、学生にとって、研究室や学会ではできない貴重なものとなっている。インターメディアテクの見学を通してそうした状況を体感することは、受講生にとっても、学芸員を専門家としてのみ捉えるのではなく、

教員と同じく教育にも関わる仕事をする人として捉えるきっかけとなるにちがいない。

4. インターメディアテクの見学を行って

2013年度の概要は、次のとおりである。社会科教材研究の受講生は、6日間の中で模擬授業づくり等の課題に取り組むこと、他の科目も多く受講していること等を配慮し、フィールドワークに関しては事前・事後の課題は極力出さずに、受講者が講座の中で考える内容を多く設けること、「東京までスクーリングに来てよかった」と実感してもらえる内容にすることを目指して、授業者の2人で相談しながら進めた。

表2 2013年度社会科教材研究 フィールドワークをいかした授業づくり概要

日 程	主な内容
8/21 事前指導 60分	[講義] フィールドワークの意義、丸の内の近世～現代の変遷（旧版地形図を利用） [講義] 博学連携とは何か インターメディアテクが指すもの
8/22 当日 9:30 集合 約2時間	東京駅→丸の内 OAZO で「ゲルニカ」（複製・実物大）を見る→日本工業倶楽部ビル外観（鉱夫と工女のレリーフ）を見る→日比谷濠から「一丁紐育」の景観を眺める→明治生命館外観を見る →大名小路を歩く→三菱1号館外観を見る→東京国際フォーラム見学→インターメディアテク見学 ※田部・石田が随時解説
8/23 事後指導 50分	[講義] フィールドワークの準備をどのように行ったか（資料紹介も兼ねる） [講義] 伝統・文化を教材化する際に意識したいこと 学習指導要領の解説

インターメディアテクについては、自由見学とした。理由は、事前に電話で確認したところ、2013年8月の段階ではガイドツアー等は計画中の段階で実現していなかったことと、混雑を避け

るために集団で立ち止まって解説することは控えてほしいという、博物館側からの要望があったためである。学生の感想は、以下のとおりである。

表3 インターメディアテク見学に関する受講生の主な感想（代表的なもの）

評価する	課題指摘
<ul style="list-style-type: none"> ・立派。入館料無料というのは驚き。 ・うまく宣伝すれば、本郷にある博物館に見学に行くきっかけになるのではないか。 ・（講義用の階段教室を見て）机が昔の大学のようで、雰囲気が良い。本物の研究者が子どもに授業をするのは、良い刺激になる。 ・不思議な物が突然置かれていて、見る側の想像力を働かせる部分もあり面白い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の解説が大人にも難しいし、文字が小さい。 ・自由に触れる展示があった方が良い。 ・映像を使った解説があると分かりやすい。 ・展示の方法が、昔の感じがする。 ・鳥の剥製の隣いきなり楽器があったり、展示に脈絡がない。

全体を通してみると、展示品の多さや、大学の机や棚が醸し出す雰囲気は、おおむね好評であった。大学の雰囲気が良いという感想は、受講生の多くが社会人であることと関係していると考えられる。一方、受講生は小学校の教員免許を取得したいと考えていることもあり、展示方法や解説を子どもに分かるように改善してほしいという意見が多かった。ただ、一部の受講生が指摘しているように、博物館では来館者が自由に展示品を観察し、何かを想像したり、発見したりする瞬間も重要である。確かに、視聴覚資料による解説は親切で分かりやすいが、その計算されつくしたストーリーを眺めると、他の問いがなかなか生まれてこない。視聴覚資料に頼りすぎてしまうと、見る者を受け身の態度に固定してしまう可能性がある（伊藤、1993）。これは授業にも通じる内容であり、学生とさらに考えたいポイントの一つである。

事後指導については、フィールドワークの準備をどのようにして進めてきたか、中学校の教員である私が参考にした文献や資料、ホームページの紹介を交えて解説した。博物館はフィールドの一部という位置づけであり、博物館だけに焦点を当てた事後指導は実施できなかった。そのため、受講生は、博物館については見学しただけという印象を抱いてしまったかもしれない。

事後指導では、たとえ短い時間であっても、教員として博物館見学を終えた後にすべきことは何か、受講生がお互いに意見を交換しながら考える時間を確保すべきだったと考えている。

その一方、担当者（田部・石田）としては、受講生による模擬授業を社会科教材研究法の大きな柱と考えており、同時期に事後レポートを課すことは極力避けたいと考えている。博物館に関しては、フィールドワークの中で考える課題を設定するため、担当者間で相談しながら、次年度に向けて準備を進めていきたい。

5. 今後に向けて

来年度以降に実現したいことは、博物館を見学する際に、受講生と博物館に関わっている人々とが会う機会を設けることである。このことは、2013年度は、インターメディアテクそのものが整備の途上であり実現できなかったが、今後、何らかの形で準備を進めたい。教員を目指す学生と、学芸員を目指す学生、博物館に関わっている研究者やボランティアが出会う中で、双方の仕事内容・制度に対する理解を深めるだけでなく、教育に携わる者として「教職（学芸員）に必要なものは何だろうか」と受講生が問い直すきっかけをつくりたい。

註

- 1) 科目担当者の田部は西生田地区の人間社会学部の教員で、人間社会学部の幼小中高の教職科目等を担当しているが、兼担で家政学部の授業科目である「社会科教材研究」のスクーリングも担当している。
- 2) 1958（昭和33）年版小学校学習指導要領における小学校授業時間数は5,821時間に対して社会科は663時間（11.4%）を占めていたが、2009（平成20）年版では5,645時間に対して365時間（6.5%）と時間数、占める割合とも少ない（田部、2004）。1999（平成10）年版に比べても、国語・社会・算数・理

科・体育の授業時間数は278時間増加したが、国語（84時間）、算数（142時間）、理科（55時間）、体育（57時間）の増加に比べて社会科は20時間増に過ぎなかった（秋本・滝沢・石塚・平沢・揚村・小宮、2010）。

- 3) 2013年夏の講座は、自然科学系が中心であった。詳細はインターメディアテクホームページ <http://www.intermediatheque.jp/>（2013年10月1日アクセス）を参照されたい。
- 4) 1960年にユネスコ総会で採択された「博物館をあらゆる人に開放する最も有効な方法に関する勧告」の中では「観覧料はできる限り無料とすべきである」という文言が

あり、東京大学総合研究博物館も観覧料を徴収していない。文部科学省ホームページ「博物館をあらゆる人に開放する最も有効な方法に関する勧告」<http://www.mext.go.jp/unesco/009/004/004.pdf> (2013年10月1日アクセス)

- 5) 東京大学総合研究博物館では、モバイルミュージアムの一環として、2008年に小中学校での展示を開始している。学校での展示は、スクールモバイルミュージアムと呼ばれ、学校にとっては教育の充実と空き教室や閉校後の校舎の活用、大学にとっては学芸員の育成につながっている。2003年に東京大学総合研究所博物館でスクールモバイルミュージアムの構想を告知したところ、

全国から70件をこえる申し込みがあり、9件が実現している(西野, 2012)。この取り組みを知っている教員の数が増えるだけでも、学校と博物館の関係性は、今後変わってゆくのではないかと考えられる。スクールモバイルミュージアムは非公開であるため、見学することはできないが、今後の研究が待たれる。

- 6) 教員と学芸員の比較については、博物館側から見た視点も参考になる。学芸員養成課程に設置されている「博物館教育論」のテキストには、学校教育制度を解説するページも設けられている(小笠原・並木・矢島, 2012)。

文献

- 秋本弘章・滝沢由美子・石塚耕治・平沢香・揚村洋一郎・小宮正美(2010): 小学校教員養成における地理教育の現状と課題－新規採用教員へのアンケート調査による分析－. 新地理, 58(1), pp.33-42.
- 井田仁康・藤崎顕孝・吉田剛(1992): 初等教員養成学部における身近な地域の野外調査に関する指導－上越教育大学の場合－. 新地理, 40(2), pp.36-48.
- 伊藤寿朗(1993)『市民のなかの博物館』吉川弘文館, pp.165-177.
- 大堀哲(1997)『教師のための博物館の効果的利用法』東京堂出版, p64, p192.
- 小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄(2012)『博

物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』, ぎょうせい

- 国際博物館会議(ICOM)(2004)「イコム職業倫理規定 2004年10月改訂」http://www.j-muse.or.jp/icom/ja/pdf/ICOM_rinri.pdf (2013年10月1日アクセス)
- 田部俊充(2004): 入門期におけるジオグラフィカル・スキルの日米比較と課題－米国をモデルとした入門期の地図指導－. 地理科学, 59(3), pp.132-139.
- 西野嘉章(2012)『モバイルミュージアム 行動する博物館 21世紀の文化経済論』平凡社新書, p133, p141, p143.
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編 平成20年8月』, p74.